Ⅴ 領域横断連携の研究会
Ⅴ−１　宮本文庫研究会
宮本憲一氏収集資料によるアーカイブ手法の考案と試行

西田　祥隆[i]
碇山　洋[ii]

はじめに

金沢大学は環境経済学をはじめ多くの分野における第一人者である宮本憲一氏から多数の図書と収集資料の寄贈を受け、そのうち１万点を超える図書についてはすでに附属図書館に宮本文庫として設置し一般の利用に供している。

寄贈を受けている収集資料は膨大な点数のうえ内容が多方面にわたっており、分類とデータベース化が非常に困難で、最初の寄贈[iii]から 20 年以上を経過していまだ公開ができていない状況である。ここでは、宮本氏収集資料の整理を通じて得られた知見をもとにアーカイブの手法についてひとつの試論をしめすものとする。

１．日本十進分類法による分類の試行

宮本氏収集資料は氏の活動領域を反映して公害・環境問題、財政、地方財政、地方自治など広範な分野にわたるもので、膨大な点数を含んでいる。

整理・データベース化の困難は、量にもよっているが、主にその内容の複雑さによっている[iv]。たとえば水俣病関連資料を例にとると、裁判記録から被害者団体の刊行物、団体の会議のレジュメ・メモなどまでが含まれている。裁判記録などは日本十進分類法によるデータベース化が可能なものである。しかし、被害者団体の会議レジュメやメモは、必ずしもすべての会議を（たとえば第１回～最終回というように）連続的に網羅しているわけではないし、なかには誰がどの会議で書いたものか直ちには判然としない紙１枚のメモなども含まれており、日本十進分類法によるデータベース化は事実上、不可能である。たとえば、１枚もののメモ類は、１枚ごとに番号を与えるのか、一定数のまとまりごとに番号を与えるのかという問題がある。前者の場合は膨大な数の番号・枝番が必要となり、後者の場合はどういう基準でひとまとまりとするのかが大きな問題となる。

当初、私たちは、日本十進分類法によるデータベース化をめざし、大分類（公害・環境問題、財政など）を行い、ついで中分類（たとえば公害問題であれば、水俣病関連、四日市ぜん息関連など）に取り組んだ。中分類がほぼ完了して小分類（たとえば水俣病関連であれば、裁判関連資料、団体別会議レジュメなど）に取り組もうとしたところで、上述の問題に逢着したのである。

２．可塑型・初期化可能型アーカイブの考案と試行

こうした経過を経て、私たちは日本十進分類法による分類は不可能であると判断し、アーカイブの手法をつかうことを考え、関連文献による研究や専門家に対するヒアリングを進めてきた。その結果、アーカイブ関連文献は公文書に関するものが多く、宮本氏収集資料のように研究者が長年、多方面にわたって集めた資料をアーカイブする手法は未確立であることが判明した[v]。

ひとつの手法として、分類をあえてせず、寄贈された順に収納箱に収めて箱に番号を付け、ごく大まかな内容をデータベースにする方法がある[vi]。この方法では、検索の容易さの点でやや難があるが、資料が寄贈の順に並んでいるので、どのあたりの箱に目的の資料があるかの見当をつけて探索することで、その資料に辿り着ける。

しかし、宮本氏収集資料についてはすでに中分類が行われており、この手法はそのままでは適用できない。そこで考案したのが、これを応用した可塑型・初期化可能型アーカイブ法である。

まず中分類されたボックスごとにアルファベットをつける（たとえば、水俣病関連はA、といった具合)。つぎに箱の中身に番号をつける（たとえば、（1）市民団体会議レジュメ、といった具合)。これをデータベースに登録する（A－1（1）市民団体会議レジュメ、といった具合)。これで、A－1の箱には水俣病関連の何らかの市民団体の会議レジュメが入っていることまでは分かるようになる。

【例】
A＝水俣病関連資料　ファイルボックスごとに1、2、3……と枝番をつける
A－1のボックスの内容
（1）市民団体会議レジュメ
（2）市民団体会報
（3）市民団体主催シンポジウムのチラシ　　など

しかしこれでは、なんという団体のいつ開催されたどのような会議の資料がA－1のボックスに入っているかは、現物をみるまで分からない。利用者は、自身が必要とする資料に行き当たるまで、それが入っていそうなボックスを開いて探索を繰り返すのである。ここには次のような意味がある。

①すべての資料を完全に分類しデータベース化するという（おそらくは不可能な）膨大な作業を回避する。

②データベース作成者の作業の「大きな負担」を、個々の利用者の探索の「小さな負担」に転嫁する。

③実際の利用は研究者・専門家によるものがほとんどを占めるであろうことを前提としているので、②が許容されると考える。

④目的の資料の探索の過程で予期せぬ価値ある資料をみつけることもあり、利用者にとって有益である。

ところで、このようにアーカイブすると、利用が増えてくる過程で新たな分類の仕方（収納先ボックスの一部変更など）が適当であることが判明する可能性がある。また、閲覧された資料が利用者の不注意によってもとのボックスに戻されない可能性も否定できない。そこで、このアーカイブを可塑型にしておくのである。すなわち、新たに寄贈された個々の資料に枝番をつけてファイルボックスに収納するところからはじめて、ボックス間の資料の移動、枝番の付け直しなどをデータベースに記録するとともに、資料の「物理的な状態と移動」をすべてデジタルカメラで撮影し記録しておくのである。ただ記帳するだけでなく、物理的な状態・移動を記録するのは、積み重ねられた資料の位置、順番に意味があることが後に判明することがありえるからでもある。こうすることによって、新たな分類に不都合があることが判明したときには、いつでもひとつ前、ふたつ前と、前の段階にもどることができる。これを繰り返せば、極端な場合、いちばんはじめの段階にもどって（初期化して）最初から作業し直すことさえ可能なのである。また、こうしておけば、将来、よりよい整理・データベース化の手法が開発されたときには、そちらに変更することも可能になる。

以上を要するに、整理・分類の負担を大胆に削減し、その分、利用者に少しずつ探索の負担をしてもらい（前述②)、途中で問題があればもとにもどして修正できるような仕掛

けにしておくということである。

おわりに

この可塑型・初期化可能型アーカイブの手法には、利用者の負担を大きくするとの批判もありえる。しかし、最もおそれるべき問題は、誰がどれだけ負担するかということではなく、膨大な量の貴重な資料が死蔵されてしまうことである。ほとんど不可能な分類が終わる（終わらないのだが）までいつまでも利用を待つほうがよいのか、資料の探索に多少の負担はあっても利用できるほうがよいのか。後者に割り切るのがこの手法である。

---

[i] 金沢大学大学院人間社会環境研究科客員研究員

[ii] 金沢大学人間社会研究域経済学経営学系教授

[iii] 宮本憲一氏は現役で研究を続行中であるため、手もとに置く必要のなくなった資料から順次、寄贈されている。

[iv] 宮本氏収集資料には、アナログレコードや新聞記事の要約を記入したカード、出自不詳のスライドフィルムなど、さまざまな媒体が含まれている

[v] 小川千代子ほか編著『アーカイブ事典』（大阪大学出版会、2003 年）、記録管理学会ほか編『入門・アーカイブズの世界――記憶と記録を未来に』（日外アソシエーツ、2006 年）、松岡資明『アーカイブズが社会を変える――公文書管理法と情報革命』（平凡社、2011 年）、朝日祟『実践アーカイブ・マネジメント』（出版文化社、2011 年）などを参照。

[vi] たとえば、公益財団法人公害地域再生センター（あおぞら財団）がこの手法を採用している。